

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Pattern practice再考 : その位置づけと今後の可能性
Author(s)	藤原, 陽子
Citation	山口市教育研究年報 , 9 : 141 - 142
Issue Date	1998-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053444
Right	
Relation	



Pattern practice 再考

—その位置づけと今後の可能性—

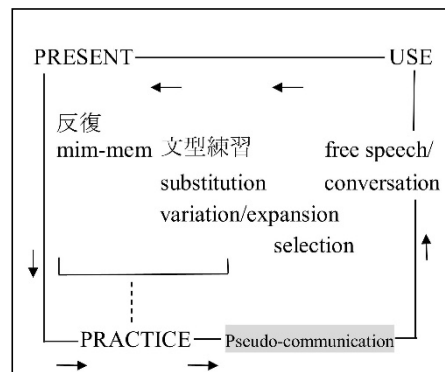
山口市立白石中学校 教諭 藤原 陽子

1 はじめに

本稿では、パタン・プラクティスに関する文献を概観する。このテーマを取り上げた理由は、その本質を理解されないまま形骸化してしまった感のあるパタン・プラクティスの意義を再確認したいと考えたからである。これに基づいての実践を授業の展開や復習段階において行い、VTR で授業記録をとっているが、その報告は稿を改めたい。

2 パタン・プラクティスの位置づけ

金田 (1995) は、右図を示し、言葉の学習には提示—練習—使用というサイクルがあると述べている。教師は徐々に生徒の発話の自由度を増していく工夫をしなければならないが、その工夫を体系化してくれるのが「文型練習」である。模倣—反復のあとに続く代置練習、交換練習、拡張練習、選択練習の技法は、徐々に生徒の側の裁量度、自由度が増していくように並んでいる。



3 パタン・プラクティスの本質

- (1) Lado (1964)によれば、パタン・プラクティスはスピーディーな口頭のドリルであり、生徒は各 cue の後で、通常の会話のスピードで文を発話する。1クラスで1分間に20から30の異なった文を発話するペースなので、50分授業では1000から1500のレシテーションを行うことになる。
- (2) Byrne (1986)によれば、最初に提示された際の即時のプラクティスをかなりの量必要とするだけでなく絶え間ない復習も必要である。パタン・プラクティスは、繰り返し行うことにより学習を促進させることができるものであるといえよう。
- (3) パタン・プラクティスは機械的であるという見方がしばしばなされるようであるが、Fries and Fries (1961)は、現実の文脈を持たない文の単なる機械的な操作活動では、構造は言語使用のレベルでマスターされることはないとして、真のコミュニケーションにおける英語の使用を目標に位置づけている。
- (4) パタン・プラクティスは学習者中心の活動である。Fries and Fries (1961)によれば、対話という文脈の中で生きた英語を生徒が練習できるような時間を可能な限り多く持つことが大切である。教材の提示後は、その授業時間の教師の話す時間は全時間の7分の1以上を占めるべきではない。Norris (1989)によれば、生徒の練習の機会がオーラル・アプローチの授業プランのコアとなるものである。

- (5) パタン・プラクティスは、順序立てた一連のものとして行われるものである。Byrne(1986)によれば、口頭での流暢さという目的に至るためには、モデルを模倣したり cue に応答したりする段階から、自由にその言語を使用して自分の考えを表現することができる段階にまで生徒を導かなければならない。しかし、これら2つのプロセスは常に共に進んでいくべきものである。もっとも、自由な発話に対する制限された発話の比率はそのコースが進むにつれて変化していくものであるが。
- (6) Tulving and Thomson(1973)によれば、貯蔵されているものだけが検索されるのであり、いかにして検索されるかはどのように貯蔵されたかによる。また、金田(1995)によれば、しっかり記憶されているものは、いくら長い文でも操作の負荷量が少なく取り出すことができると言われている。肝心なのは、記憶の深いところへ学習したことを下ろしてしまうこと、言い替えれば、意識しなくなるレベルまで学習を進めることである。これは繰り返し練習することによって保証されるものである。こうした「記憶→検索」という視点からも、パタン・プラクティスの意義を見出すことができると考える。

4 おわりに

Nishimura(1996)が指摘するように、理解してからドリル段階に入り、自動化できるようになってから応用活動に進むという手順は、真のコミュニケーションに近づくための大切なプロセスである。今回先行研究の調査をすることにより、その必要性と可能性を再確認することができた。パタン・プラクティスの本質を正しく理解し、今後さらに実践の場で効果的に生かしていきたい。

<参考文献>

- Byrne, D. (1986). *Teaching oral English*. Harlow: Longman.
- Fries, C. C., & Fries, A. C. (1961). *Foundations for English teaching*. Tokyo: Kenkyusha.
- Lado, R. (1964). *Language teaching: A scientific approach*. New York: McGraw-Hill, Inc.
- Nishimura, S. (1996). *A reconsideration of pattern practice: From imitation to communication*. Unpublished master's thesis, Yamaguchi University, Japan.
- Norris, W. E. (1989). Innovations in the 'Oral Approach': 'No Magic Method' In W. E. Norris & J. E. Strain (Eds.), *Charles Carpenter Fries: His 'Oral Approach' for teaching and learning foreign languages* (pp. 21-25). Washington, DC: Georgetown University Press.
- Tulving, E., & Thomson, D. M. (1973). Encoding specificity and retrieval processes in episodic memory. *Psychological Review*, 80(5), 352-373.
- 金田道和.(1995). 「コミュニケーション能力を育てるための英語の授業」『平成6年度研究集録』第18集. pp. 37-48. 山口県中学校教育研究会英語部会.
- 【謝辞】本研究において先行研究を概観するにあたり、金田道和教授（山口大学）に貴重なご示唆とご助言をいただいた。記して厚く謝意を表したい。
- 【付記】本稿は、平成9年度山口市教育研究会研究委託による研究の成果を報告したものである。